

チャレンジ農業 2024

特集

- I 旭川産農産物PR事業について
- II 旭川市農業センターの取組について
- III 旭川市の鳥獣被害対策への取組について

旭川市営農改善推進協議会

発刊にあたって

旭川市営農改善推進協議会
会 長 岸本 文孝

旭川市営農改善推進協議会は、地域農業の持続的な発展と安定した農業経営の確立を図るため、市内の農業関連団体が一致団結し、昭和47年7月に発足いたしました。

本協議会の主な取組といたしましては、農業関連機関・団体と連携の上で、経営・担い手育成、金融、水稻畑作、園芸、畜産、土づくり、土地改良、鳥獣対策、森づくりの9つの専門部会を設置し、各分野における課題解決に向けた事業を推進しているものです。

農業者の皆様には本協議会をより身近に感じていただいた上で事業を進めていくことが重要であるとの思いから、上川農業改良普及センターの御協力のもと、毎年作成し配布している“チャレンジ農業”ですが、各専門部会での取組をお知らせするなど、より活用しやすい冊子となるよう作成しておりますので、本年の経営を考える上での一助として御活用いただきたいと存じます。

本年も皆様方が御健勝で営農に従事され、実りの多い豊穰の秋を迎えられますことを御祈念申し上げ、発刊の言葉といたします。

目 次

特集

I	旭川産農産物 P R 事業について	-----	1
II	旭川市農業センターの取組について	-----	3
III	旭川市の鳥獣被害対策への取組について	-----	6

農作物の生育状況

I	令和5年 水稻の生育経過と作柄の概要について	-----	9
II	令和5年 畑作作柄の概要について	-----	13
III	令和5年 園芸作物の概況について	-----	15

旭川市の新顔野菜

	さつまいも（かんしょ）	-----	17
--	-------------	-------	----

営農技術トピック

I	空育195号（そらきらり）実証展示ほ調査結果	-----	21
II	地域を繋ぐ産学連携「旭農高日本酒プロジェクト支援」	--	23

参考資料

I	令和5年 旭川市における気象の経過	-----	26
II	統計資料	-----	28

I 旭川産農産物 P R 事業について

【旭川市農政部農業振興課】

本市の農畜産物や食文化に関する P R 活動強化のため、「旭川食のアンバサダー」の設置と旭川市ブランド推進係公式 X (旧 T w i t t e r) の運用を始めました。今年度の実績を御紹介いたします。

1 旭川食のアンバサダーについて

令和 5 年度より本市の農畜産物や食文化に関する P R 活動強化のため、「旭川食のアンバサダー」を設置しました。初代「旭川食のアンバサダー」には、旭川市出身の下國伸シェフが就任。今後 3 年間にわたり、P R 活動を行っていただきます。

【下國伸シェフ就任コメント】

旭川の農産物を素晴らしいものに昇華させるのが自分の任務。そして料理の楽しさ、食の楽しさを、未来ある子どもたちに伝えていきたい。



就任動画は
こちら



2 令和 5 年度の活動概要（北の恵み食べマルシェへの出店）

旭川食のアンバサダーの活動は、4 月のアンバサダー就任に始まり、7 月にキャンプイベントへの出演、8 月に旭川産の野菜を使った料理教室や研修会の講師を務めるなど多岐にわたっています。

9 月には、北の恵み食べマルシェへ「下國伸フードラボ」として出店。4 J A 統一ブランド米「大雪山見て育ったの ななつぼし」と 4 J A それぞれのブランド米を日替わりで使用し、旭川カレーと姉妹都市の南さつま市をモデルにした南さつまカレーを販売。3 日間で 3, 0 0 0 食を超えるカレーを提供しました。旭川カレーは、旭山動物園東門レストラン「カムイチカブ」で、旭川産野菜を添えて提供中です。



3 活動の目玉「あさひかわ食の応援隊」

幅広い世代の方に旭川の農産物や食の魅力を知ってもらいたいという目的と、旭川食のアンバサダーと3年間一緒に活動する隊員を募集したいという下国シェフの強い思いを受け、小学4年生3名、中学1年生2名、高校1年生1名の6名が「あさひかわ食の応援隊」として活動しています。

最終目標である「新しい旭川名物の開発」に向けて、調理体験や旭川の農業、食品産業を知る機会を重ねています。隊員だけでなく多くの人に「旭川を知ってもらおう」ため、それらの活動の様子をYouTubeで公開しています。令和5年度は4回活動し、第65回旭川冬まつりでは自分たちで考案したレシピを多くの人に試食してもらおうという経験も積むことができました。

来年度も、新たな取組に挑戦し、今後もSNSで情報発信していきますので、隊員たちの活動を応援してください。



4 旭川市ブランド推進係公式Xについて

旭川市の食と農の発信に特化したアカウントを令和5年4月に開設しました。北海道でトップレベルの米の生産量を誇る「旭川」をPRするため、4JAと市内生産者、流通事業者の方に御協力をいただき、合計で1t分のお米を全国各地の200名様に抽選でプレゼントするSNSキャンペーン「米1tプロジェクト」を展開しました。キャンペーンの効果もあり、現在フォロワー数は2万人を超えています。今後も新しいコンテンツを取り入れながら、旭川の農業や食文化の魅力発信に力をいれていきます。

5 各媒体へのリンク



旭川市 YouTube



下国シェフ考案レシピ集



旭川市ブランド推進係公式X



Ⅱ 旭川市農業センターの取組について

【旭川市農業センター】

農業センターでは、旭川青果物生産出荷協議会（各品目部会）、J A、企業等の要望に基づく園芸作物等の試験研究、新規就農希望者や新規園芸参入者を対象とした研修、健全な土づくりを推進するための土壌分析や土づくり支援など、本市農業を支援するための様々な事業に取り組んでいます。

1 令和5年度に実施した主な試験研究 ※（ ）は要望元

(1) サツマイモ苗の増殖実証試験（市内農協）

道内のさつまいも栽培は、近年の温暖化の影響を受け増加傾向にあり、寒冷地特有のねっとりとした食感で、甘いさつまいもができることから、道内産さつまいもの需要が高まっていますが、栽培面積の増加に伴い主要品種の苗が入手しづらい状況になっています。また、さつまいもの栽培方法としては、本州産地では、一般的に切り苗を増殖してから定植するのに対し、市内では購入した切り苗を直接定植することが多く、栽培コストに占める切り苗に係る費用の割合が高くなっています。そこで、栽培コストを抑えた主要品種の切り苗の確保を目的として、無加温での切り苗増殖の可能性を検討しました。

(2) ナスの養液栽培における品種特性調査（市内農協）

国内のナス栽培は、近年の気象変化の影響を受け、高温期の栽培が困難になっています。また、土耕栽培では土壌病害が発生しやすいことも課題となっていることから、冷涼な市内においてナスの養液栽培の可能性を検討しました。本試験では、市内の水稻育苗ハウスの有効利用を目的として、6月から10月までの栽培期間で養液栽培を行い、市内に適した品種を検討しました。

また、給液管理などの省力化が可能な環境制御装置を使用した栽培方法についても検討しました。



ナスの栽培ほ場

(3) 下水汚泥肥料の効果検証試験（市内農業者ほか）

下水汚泥は、窒素やリンなどを多く含むことから、一部の先進自治体において肥料原料として利用されています。

本市においても下水汚泥の肥料化が検討されていますが、肥料化に当たっては品質や安全性の確保が課題となることから、市内で試作された下水汚泥肥料を用いてポット栽培を行い、その特性について検証しました。

(4) シャインマスカットの栽培法試験（市内農協）

市内農協では、新規作物として‘シャインマスカット’の導入を検討するため、令和2年度にプロジェクトチームを設立し、その中で当センターは、試作試験と技術支援を行っています。試作試験では、令和3年度にハウス内に苗木を7本定植し2年が経過しましたが、越冬時に寒さによって障害が発生しやすいことが確認されたため、市内の栽培においては、防寒対策が必要であることが明らかとなりました。

昨年度までの試験結果では、剪定後の樹全体にムシロを巻き付け、地面に這うように樹を寝かせ、積雪下にした状態で越冬することで障害が軽減されることが確認できたことから、今年度についても引き続き防寒対策の効果を検証し、越冬の可能性を検討しました。

また、苗木の定植から2年が経過したため、初収穫へ向けた栽培管理（ジベレリン処理など）に移行し、収穫した果実の特性を調査しました。



収穫間近のシャインマスカット

2 農業担い手研修育成事業

市内の農業の担い手育成を目的として、営農技術や、農業機械、経営の基礎知識等をテーマに、質疑応答のしやすい少人数制の研修を行い、その後も巡回指導を行うことにより、早期の経営安定化に寄与します。

また、今年度から近隣8町（旭川大雪圏域連携中枢都市圏）の研修対象者で希望する方を農業センターの研修に招き、近隣町と連携した研修教育機関として研修を実施しています。

対象と支援内容は、次のとおりです。

対象	支援内容
・就農前研修生	・道認定の研修教育機関として少人数制の研修を実施
・就農直後の方 ・新たに園芸品目の栽培を始める方	・上記研修における合同研修を実施 ・ほ場への巡回による現地指導

(1) 令和5年度の研修生の内訳

- ・市内就農前研修生 2名
- ・市内新規就農者、後継者等 12名
- ・他町の研修対象者 13名
(鷹栖町、東川町、比布町、当麻町、東神楽町)

- (2) 令和5年度の研修内容
- ・農業センターほ場での栽培研修や農薬、病虫害、土づくり等の座学研修
 - ・パイプハウスの施工研修
 - ・農業機械、経営管理、販売・流通の座学研修
- (3) 令和5年度の巡回指導（4月～11月分）
- ・対象農家数：12戸
 - ・延べ回数：32回



パイプハウスの施工研修

3 土づくり対策支援事業

健全な土づくりと過剰な施肥を抑えた適正施肥栽培の普及のため、土壌診断を行っています。生産性を保ちつつ、肥料コストを抑えるためには、土壌診断による適正施肥が有効です。分析内容及び手数料は、次のとおりです。

分析種別	内容	手数料額
一般分析	家庭菜園等を想定した、必要最小限の項目を分析します。	700 円
総合分析	作物栽培に重要となる、肥料の多量要素（窒素・リン酸・カリ）に加えて、微量元素等も含めた広範な項目を分析します。	1,170 円

※ 一般分析には、窒素や微量元素等は含まれません。農業者の方は、より充実した診断が可能な「総合分析」をお勧めします。

※ 申請に当たっては、最寄りのJAに御相談いただくか、採取した土を持参の上、農業センターに直接申請してください。（通年受付）

また、更なる土壌診断の利用促進及び適正施肥栽培の普及を図り、生産の安定化及び営農コストの低減に資するため、土づくり支援に特化したほ場巡回による現地指導やニュースレターによる情報発信を行っています。



※ 現地指導の様子

（左図）ほ場の土壌断面調査
（右図）各土層から採取した
土壌診断用サンプル

詳しくは農業センター（61-0211）までお問合せください。

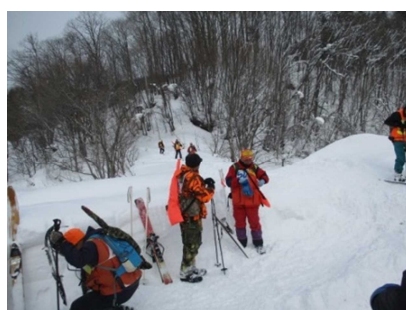
Ⅲ 旭川市の鳥獣被害対策への取組について

【鳥獣対策専門部会】

1 旭川市鳥獣被害対策実施隊の活動について

平成26年度より（一社）北海道猟友会旭川支部の協力のもと、「旭川市鳥獣被害対策実施隊」（以下「実施隊」という。）を設置し、鳥獣被害対策に取り組んでいます（令和5年度の隊員数：197人）。

農業被害の防止のため、旭川市全域において、主にエゾシカやキツネなどの有害鳥獣の捕獲・処理、捕獲した鳥獣の止め刺し・解体などを行っています。



エゾシカー斉捕獲の様子

○エゾシカ…銃器、くくりわなによる捕獲（4～9月）

及び越冬地での一斉捕獲（2、3月）

キツネ…銃器、箱わなによる捕獲（4～9月、1～3月）

○駆除活動に当たるハンターは、銃器を持つときにオレンジ色の帽子とベストを着用し、腕章をしています。（右図）

○銃器による捕獲活動は原則、日曜の早朝・夕方にします。

○銃器での捕獲は、人や建物などに影響が及ぶ（流れ弾が届くなど）場所では行えないことや、実施隊員が訪問したときに必ず出沒しているとは限らないため、農地内ではそのまま駆除できない場合もあります。



活動に際し、農業者の土地に立ち入る場合があります。

また、銃声が聞こえることもあります。

農業被害軽減のために、御理解、御協力をお願いします。

2 農業被害の軽減のために

実施隊の活動により、農業被害をある程度軽減することはできますが、市内の広い農地の被害を全て防ぐことはできません。

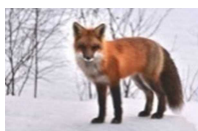
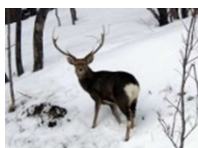
農業被害を軽減するためには、実施隊員による駆除活動だけではなく、個々の農業者の方の自己防衛への意識、行動が不可欠となりますので、特に次の点について御協力をお願いします。

<農業被害防止のための自己防衛手段>

対 策	理 由
・ 野菜など農作物の残さを放置しない。 ・ 堆肥を長期間野積みしない。	・ 残さや堆肥に野生動物が寄り着き、繰り返して農地にやってくる原因になります。
・ ほ場内でキツネやシカを見かけたときは、爆竹などで威嚇し、追い払う。	・ 追い払いをしないと、野生動物が人を警戒しなくなり、より農地に居着くようになります。
・ 被害に遭いやすい作物の周りにネットや柵、テグスを張る。	・ 侵入しづらい状態にすることで、野生動物が寄り付きづらくなります。
・ 納屋の床下の隙間をブロック等でふさぐ。 ・ 空き家を放置しない。	・ キツネやアライグマは、納屋の床下などから侵入し、住みついてしまう場合があります。結果、繰り返して被害が出てしまうだけでなく、繁殖して数が増えることにもつながります。

自衛を行っても被害が減らない場合は、旭川市農業振興課(0166-25-7470)に御相談ください。以下の流れで、現地確認の上、自衛策のアドバイスや実施隊の出動要請を行います。

① シカ・キツネ



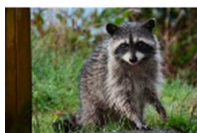
旭川市に通報！
0166-25-7470
(農業振興課)

現地確認
市職員が被害状
況を確認

・自衛策のアドバイス
・市職員からの情報をもと
に実施隊員出動

※実施隊は、通報があっても即日対応できない場合や、現着しても現地の状況によっては銃器やわなを使用できない場合もある点を御理解ください。

② アライグマ



旭川市に通報！
0166-25-7470
(農業振興課)

現地確認
市職員が被害
状況を確認

箱わなの設置(貸与)
※捕獲した際は、旭川市森林
組合に連絡(080-6083-
2355)

※アライグマは外来生物法に基づく講習を受講すれば(市職員が現地で行います)、従事者に登録され、「箱わな」による捕獲を通年で実施できます。箱わなの管理は農業者自らが行います。

＜わな捕獲のポイント＞

- ・わな設置中は、毎日必ず見回りを行ってください(ネコやタヌキが混獲される場合があります)。
- ・わなのエサはこまめに変えます(エサが古くなると捕獲しづらくなります)。
- ・捕獲できた時はわなの扉を結束します(指先が器用なので脱出します)。

3 ヒグマ対策について

NPO法人もりねっと北海道に委託し、市内におけるヒグマによる農業被害の実態把握、被害軽減・拡大予防対策、要因の除去等をとおして安全確保を図りました。

被害地の現地調査として、自動撮影カメラやドローン・ヘアトラップ等の機材を活用したヒグマの生息状況調査を行い、問題個体の特定を試みました。

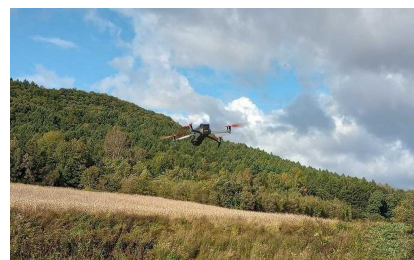
また、農業者向けの研修会を開催し、ヒグマの基本的な生態・農業被害の発生要因・防除の考え方や各種対策技術などの普及啓発活動を行いました。



自動カメラによる撮影



農業被害現場で発見された糞



ドローンによる上空からの撮影

ヒグマを目撃・痕跡を発見した際は

市役所(環境総務課 ☎25-5350)または警察へ通報をお願いします。
足跡やフンを発見したときには、通報をいただいた後に、その足跡などの写真の提供をお願いします場合があります。
安全に配慮していただきながら、可能な限り写真を撮っていただけると助かります。

I 令和5年 水稻の生育経過と作柄の概要について

【上川農業改良普及センター】

1 生育の経過

(1) 融雪期～春耕起時期

融雪期は、平年より11日早い3月29日でした。3月には平年を上回る気温で推移し、順調に融雪が進みました。融雪期が早いこと、4月中旬の降水量が少なかったことから、ほ場の乾きは良く、耕起作業は平年より7日早い4月19日から始まり、耕起盛期は平年より2日早い4月28日でした。

表1 令和5年度水稻生育期節および作業期

生育期節				農作業進捗状況			
項目	本年	平年	遅速	項目	本年	平年	遅速
出芽期	4/25	4/25	±0	は種	始	4/14	4/16 早2
活着期	5/26	5/27	早1		期	4/19	4/20 早1
分けつ始	5/31	6/1	早1		終	4/25	4/25 ±0
幼穂形成期	6/25	6/27	早2	耕起始		4/19	4/26 早7
止葉期	7/10	7/12	早2	耕起盛期		4/28	4/30 早2
出穂始	7/17	7/20	早3	移植	始	5/16	5/18 早2
出穂期	7/21	7/25	早4		期	5/21	5/23 早2
出穂揃	7/26	7/29	早3		終	5/28	5/28 ±0
成熟期	9/5	9/12	早7	収穫	始	9/9	9/17 早8
					期	9/19	9/25 早6
					終	9/30	10/5 早5

(2) は種～移植期

は種作業について、は種始は平年より2日早い4月14日、は種期は平年より1日早い4月19日でした。

育苗期間（は種期～移植期）は、平年並の32日間でした。出芽期は平年並の4月25日でした。育苗期間中の5月2半旬に低温寡照だったものの、5月3・4半旬は高温多照でした。移植時の苗質は平年に近く、苗質評価は並でした（表2）。

表2 移植時の苗質（R5 普及センター調査ほ なたつぼし（成苗ポット））

	草丈 (cm)	第一鞘高 (cm)	葉数 (枚)	茎数 (本)	乾物重 (g/100本)
R5	14.2	2.3	4.3	1.8	4.20
平年	14.8	2.5	4.4	1.8	4.70
平年差	-0.6	-0.2	-0.1	0	-0.50

移植始は平年より2日早い5月16日、移植期は平年より2日早い5月21日、移植終は平年並の5月28日でした。

(3) 移植後の茎数の推移

移植時期の5月4半旬は好天でしたが、5半旬は低温であったため、稲の活着・分けつにばらつきが見られました。6月2半旬以降、気温は高く推移しました。㎡当たり茎数は、7月1日時点で639本（平年比108%）、8月1日時点の㎡当たり穂数は661本（平年比106%）でした。

(4) 幼穂形成期～出穂期・開花期間

幼穂形成期は平年より2日早い6月25日でした。幼穂形成期後から開花期まで高温で推移し、不稔の発生は少なかったです。また、出穂期は平年より4日早い7月21日でした。出穂期間(出穂始～出穂揃)は9日間と平年並の日数でした。

(5) 登熟期間～収穫

8月の平均気温は平年比114%、日照時間は平年比107%と平年を上回り、断続した降雨により、土壌中の水分は十分保たれていました。そのため、登熟は進み、成熟期は平年より7日早い9月5日でした。収穫始は平年より8日早い9月9日でした。9月3半旬から4半旬の断続的な降雨により、収穫作業は滞ったものの、収穫終は平年より5日早い9月30日でした。

(6) 収量構成要素・決定要素

普及センター生育調査ほにおける「ななつぼし」の収量構成・決定要素を平年と比較すると、 m^2 当たり穂数はやや多く、総粒数・稈実歩合・稈実粒数・精玄米重は並でした。登熟歩合(計算による推定値)は、79.5%となり、千粒重は23.1g、等級は1等でした。屑米重は、平年より42%少なかったです。

「ゆめぴりか」は、 m^2 当たり穂数が多く、総粒数・稈実粒数がやや多かった一方、精玄米重・千粒重が並、屑米重は少なかったです。

(7) 蛋白質含有率

全道における主要3品種の低蛋白米(蛋白質含有率6.8%以下)出荷率は、4.8%と令和3年度、令和4年度と比べてかなり低かったです(12月22日現在、以下同)。

上川の低蛋白米出荷率は、4.5%となりました。「ゆめぴりか」の第一区分S(蛋白質含有率6.8%以下)の出荷割合は3.2%、第一区分以上(蛋白質含有率7.4%以下)の出荷割合は58.6%でした。

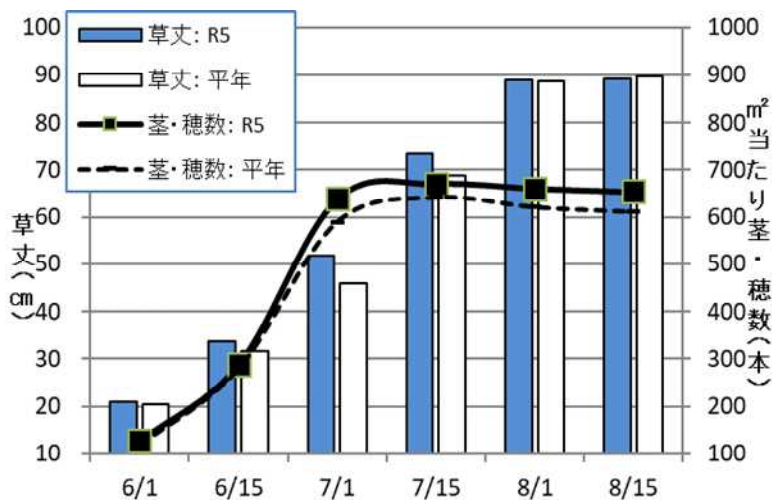


図1 草丈・㎡あたり茎数の推移

(普及センター生育調査ほ 成苗ポットななつぼし)

※茎・穂数(本/㎡)は8/15のみ穂数を示す

表3 品種別の収量構成要素・決定要素

品種	年次	穂数 (本/㎡)	一穂粒数 (本/穂)	総粒数 (粒/㎡)	稈実歩合 (%)	稈実粒数 (粒/㎡)	精玄米重 1.9mm上 (kg/10a)	屑米重 (kg/10a)	千粒重 (g)	等級	登熟歩 合 (%)
ななつぼし	R5	654	56	36,493	94.9	34,632	665	18	23.1	1.0	79.5
	平年	611	60	36,477	95.3	34,762	667	31	22.6	1.2	82.2
	平年比	107%	93%	100%	-0.4	100%	100%	58%	102%	-	-2.7
ゆめぴりか	R5	778	47	36,456	93.1	33,941	617	21	22.7	1.2	75.6
	平年	676	50	34,003	93.8	31,895	616	37	23.2	1.3	78.4
	平年比	115%	94%	107%	-0.7	106%	100%	56%	98%	-	-2.8

* 千粒重の篩目は、1.9mm

2 令和5年度の収量・品質の考察

(1) 収量

移植後の高温によって分けつが促進され、初期茎数の確保・穂数の確保・総粒数の確保につながりました。また、前歴期間・冷害危険期の高温により、不稔が軽減され、籾殻肥大によって千粒重が確保され、平年並の収量構成要素が確保されたと推察されます。

(2) 蛋白質含有率

普及センター生育調査ほにおける「ななつぼし」の蛋白質含有率は、多くの地点で6.8%を上回りました。考えられる二つの要因を以下に述べます。

① 登熟期間の異常高温

本年度は、出穂期から成熟期まで概ね平年より高く推移し、積算気温が1,159℃と平年より167℃高かったです。低蛋白米出荷率が低かった本年度に対して、同じく高温年であった令和3年度は、低蛋白米の出荷率が高かったです。この差が生じたのは、特に、本年度の8月10日以降の気温が平年より高かったことが影響しているといえます（図2）。

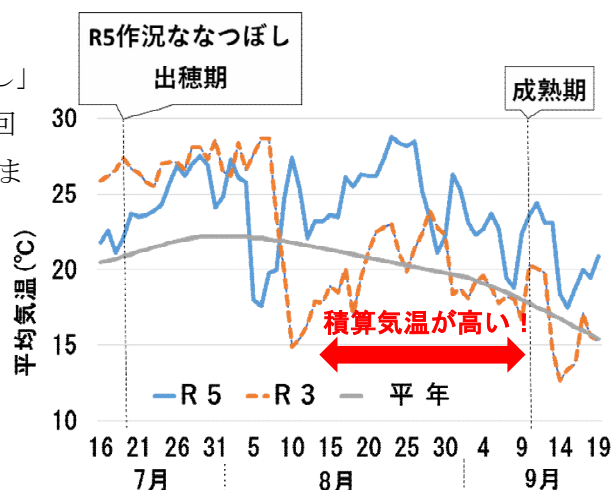


図2 7月16日から9月20日までの
平均気温(R5) (旭川アメダスより)

② アンモニア態窒素の吸収

今年度の春は、ほ場が乾きやすい条件でした。乾土効果により初期の土壌中の窒素発現が多かったと考えられます。そのため、水田土壌中のアンモニア態窒素は、6月15日は高く、その後急激に低下しました。このことから、生育初期に多く窒素が吸収されたといえます。その後、8月1日にかけて減少し、その後8月15日にかけてやや上昇しました（図3）。

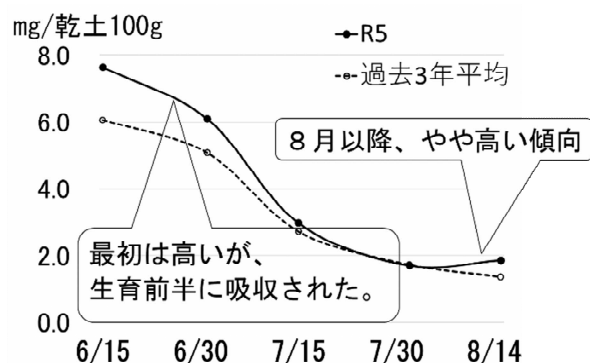


図3 水田土壌中アンモニア態窒素の推移

以上の2点を踏まえると、本年度は、登熟期間中の猛暑により、登熟後半の窒素吸収が盛んに行われ、結果として蛋白質含有率上昇につながったと考えられます。

(3) 倒伏の発生

令和5年度は、倒伏が多く発生しました。そもそも、稲の倒伏は登熟期、つまり稈が伸びきった後に起こることがほとんどです。倒伏は地際（下位節間）で稈が折れ曲がることであり、稈の上部が折れることは少ないです。

また、稲の倒伏抵抗には稈の強度だけではなく、それを包んでいる葉鞘の強さも関係していると言われます。葉鞘は葉が枯れると著しく弱りますが、本年は8月の猛暑の影響で、茎葉の枯れ上がりが登熟中期から見られました。

さらに、今年度の作況調査結果を、同様な高温年であった令和3年度のものと比較すると、草丈・稈長・穂長・㎡穂数はほぼ同じ結果でした（表4）。しかし、ワラの重さ（以下ワラ重）が令和3年度比で88%と軽い結果でした（図4）。

このように、稈、葉鞘とも脆弱になったところに、風雨や病害（紋枯病（疑似紋枯症含む））が追い打ちをかける形となったと推察されます。このことから、令和5年度の稲体は、葉鞘及び稈が十分に生育せず、軟弱な稲体となり、倒伏につながったと推察されます。



写真1 枯れ上がった株元

表4 R3, R5の稲体の姿 ワラ重
（上川本所作況データより）

年度	草丈 (cm)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	㎡穂数 (粒/㎡)
R3	88.9	71.8	16.6	659
R5	89.2	73.6	16.4	654

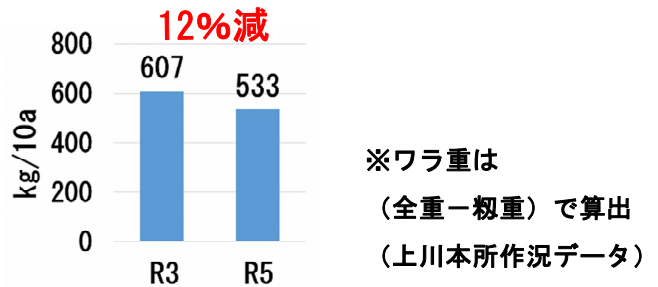


図4 R3, R5のワラ重

3 病害虫の発生状況

いもち病の発生量は並ですが、局所的に葉いもち、穂いもちが確認されました。発生した要因は、①多湿（6月下旬から8月上旬の断続的な降雨）②風通しの悪さ（茎数が平年より多かった）が考えられます。早期発見と薬剤散布により、地域への蔓延は抑えられました。発生予察と適正防除の実施が重要です。

アカヒゲホソミドリカスミカメの発生量は平年並でした。予察や基幹防除の実施により発生密度は概ね低いですが、牧草地の周辺や山間部などで、吸汁による斑点米の被害がありました。

ヒメトビウンカの発生量は並～やや多く、縞葉枯病の発生や、葉のすす症状が局所的に見られました。本年は収量等への影響はありませんでしたが、今後も予察と適正防除の実施が重要です。

表5 水稻病害虫の発生状況（R5）

病害虫名	初発時期	発生量	面積割合(%)		備考
			発生	被害	
いもち病（葉）	7月5半旬	並	なし	なし	局所的に発生確認（発生は1%以下）
いもち病（穂）	8月5半旬	並	なし	なし	局所的に発生確認（発生は1%以下）
紋枯病	8月3半旬	並	3.0	なし	
縞葉枯病	—	並	6.0	なし	局所的に発生確認（発生は1%以下）
ばか苗病	—	やや少～並	なし	なし	局所的に発生確認（発生は1%以下）
イネドロオイムシ	6月3半旬	並	なし	なし	局所的に発生確認（発生は1%以下）
アカヒゲホソミドリカスミカメ	6月5半旬	並	16.0	なし	
ヒメトビウンカ	4月3半旬	並～やや多	11.0	なし	収穫前にすす症状が散見
フタオビコヤガ	6月6半旬	並	4.0	なし	

注：調査地点は旭川市・鷹栖町・当麻町・比布町・愛別町

Ⅱ 令和5年 畑作作柄の概要について

【上川農業改良普及センター】

1 秋まき小麦「きたほなみ」

(1) 生育経過

- ① 令和5年産は、水稻生育が令和3年より遅かったため、は種期（令和4年秋）は平年並に進み9月15日（±0）、出芽期は9月22日（±0）であった。越冬前茎数は1,062本/㎡（平年比112%）であった。
- ② 融雪期は3月29日（早11）と早く、起生期も3月31日（早5）と早かった。
- ③ 起生期以降の気温は低かったが、4月6半旬から好天となり幼穂形成期は4月28日（早6）となった。
- ④ 5月下旬は気温が低く経過し、止葉期は5月22日（早2）、出穂期は5月31日（早1）となった。
- ⑤ 6月～7月の気温が平年より上回ったことで登熟が進み、成熟期は7月10日（早3）となった。
- ⑥ 一部で赤さび病の発生が見られたが、赤かび病の発生は少なかった。

表1 生育経過

		10月1日	10月15日	越冬前	起生期	5月15日	6月1日	6月15日		7月1日	7月15日
草丈 (cm)	R5年産	8.1	14.9	-	-	37.9	70.5	78.9	稈長 (cm)	77.2	77.2
	平年	8.7	16.2	-	-	33.9	69.9	83.8		81.2	81.7
葉数 (葉)	R5年産	1.7	3.6	-	-	-	-	-	穂長 (cm)	9.1	9.1
	平年	1.7	4.2	-	-	-	-	-		9.1	9.1
㎡茎数 (本)	R5年産	195	401	1,062	1,288	1002	755	643	㎡穂数 (本)	583	583
	平年	201	501	943	1,217	1375	949	745		695	695

表2 生育・作業期節

生育期節	R5年産	平年	差	作業期節	R5年産	平年	差
出芽期	9月22日	9月22日	±0	は種	始	9月8日	9月6日 △2
起生期	3月31日	4月5日	+5		期	9月15日	9月15日 ±0
幼穂形成期	4月28日	5月4日	+6		終	9月27日	9月24日 △3
止葉期	5月22日	5月23日	+1	収穫	始	7月19日	7月20日 +1
出穂期	5月31日	6月1日	+1		期	7月21日	7月23日 +2
成熟期	7月10日	7月13日	+3		終	7月26日	7月30日 +4

(2) 収量・品質

穂数は583本/㎡（平年比91%）と少なく、一穂粒数が21.5粒（平年比102%）と平年並、千粒重が41.5g（平年比106%）と重かった。子実重は534kg/10a（平年比101%）で、タンパクは10.0%であった。

表3 収量・品質

	㎡穂数 (本)	一穂粒数 (粒)	子実重 (kg/10a)	千粒重 (g)	タンパク (%)	等級
R5年産	583	21.5	534	41.5	10.0	1.8
平年	644	21.1	528	39.2	11.1	1.1
平年比(%)	91	102	101	106	90	—

2 大豆「ユキホマレR・とよみづき」

(1) 生育経過

- ① 5月中～下旬の降雨が平年よりやや多く、は種期は5月27日（遅1）であった。は種後は気温が高く、出芽期は6月5日（±0）と平年並であった。
- ② 7月は高温により開花期が7月12日（早3）と早くなった。
- ③ 着莢数は670 莢/㎡（平年比 106%）と多かった。莢の伸長期が高温となり、粒の肥大中に登熟が急激に進む（しわ粒）等の影響が見られた。
- ④ 成熟期は9月15日（早4）となった。また、草丈が72.6 cm（平年比 108%）と長かったため、一部でなびきが見られた。
- ⑤ 成熟期後、他作業（水稻収穫）の遅れと降雨等があり、大豆収穫が全般に遅れ、粒の品質に影響があった。

表4 生育経過

		6月15日	7月1日	7月15日	8月1日	8月15日	9月1日	9月15日
草丈 (cm)	R5年	5.8	21.1	52.6	70.1	72.6	72.6	72.6
	平年	6.0	22.2	45.4	64.7	67.0	67.2	67.2
葉数 (葉)	R5年	0.3	3.3	6.8	9.0	9.3	9.3	9.3
	平年	0.2	2.9	6.4	8.9	9.2	9.2	9.2
着莢数 (莢/㎡)	R5年	—	—	—	—	606	670	670
	平年	—	—	—	—	586	634	631

表5 生育・作業期節

生育期節	R5年	平年	差	作業期節		R5年	平年	差
出芽始	6月3日	6月2日	△ 1	は種	始	5月21日	5月20日	△ 1
出芽期	6月5日	6月5日	± 0		期	5月27日	5月26日	△ 1
開花始	7月10日	7月13日	+ 3		終	6月8日	6月5日	△ 3
開花期	7月12日	7月15日	+ 3	収穫	始	10月12日	10月6日	△ 6
成熟期	9月15日	9月19日	+ 4		期	10月18日	10月14日	△ 4
					終	10月29日	10月30日	+ 1

(2) 収量・品質

着莢数は670 莢/㎡（平年比 106%）と多く、一莢内粒数は1.4粒（平年比 92%）と少なかった。百粒重が33.3 g（平年比 103%）と平年並であったため、子実重は298 kg/10 a（平年比 101%）と概ね平年並となった。等級はしわ粒、着色粒などの被害が目立ち3等が主であった。

表6 収量・品質

	子実重 (kg/10a)	着莢数 (莢/㎡)	一莢内 粒数 (粒)	百粒重 (g)	等級
R5年	298	670	1.4	33.3	3.8
平年	295	631	1.5	32.4	2.1
平年比 (%)	101	106	92	103	—

Ⅲ 令和 5 年 園芸作物の概況について

【上川農業改良普及センター】

1 野菜の主要品目の概況

品目	作型	作業・出荷・生育の経過
きゅうり	半促成	- 定植後は強風や低温により、生育は平年並～やや緩慢だった。その後の急激な温度変化があったが、収穫始は平年並だった。 - 収穫量は 7 月の天候不順により減少した。8 月中旬から高温となり曲り果や幼果の黄化症状がみられたものの、9 月以降も気温が高い日が続き、収穫量は平年並～増加した。 - 病害虫はハダニ類の発生が目立った。単価は年間を通じて安定していた。
ほうれんそう	晩春～秋まき (雨よけ)	7 月までの生育は概ね順調で出荷量は平年並だった。 8～10 月は単価が平年より高く推移したが、8 月の高温による生育の遅れや、作付戸数・作付面積の減少により、出荷量は低く推移した。 - 病害虫は高温期の萎凋病や、ハウレンソウケナガコナダニの発生が見られた。
いちご	(無加温) 半促成	8 月上旬から 9 月にかけて定植され、定植後の活着および生育は概ね順調だった。 - 融雪は平年より早く、生育は概ね順調だった。 - 開花始、出荷始、出荷終のいずれも例年より 2 日程度早く、総出荷量はやや減少した。 - 病害虫は、アザミウマ類や灰色かび病の発生が見られたが、発生量は少なかった。
ピーマン	(無加温) 半促成	- 定植後は 4 月下旬、5 月上旬の低温によりやや緩慢だった。その後は温度が確保され生育は順調に進んだ。8 月からは高温の影響で生育が急速に進み、取り遅れが見られたほ場では、着果負担に伴う株疲れが見られた。 - 病害虫はハダニ類、アブラムシ類の発生がわずかに見られた。 - 出荷量は作付け戸数の減少により低く推移した。単価は年間を通じて安定していた。
こまつな	2 月下旬～9 月下旬 まき (雨よけ)	- 春先は融雪が早く比較的高温で推移したため、生育・出荷ともに順調であった。 7～8 月は、高温等の影響により、病害虫の発生は例年より多く、コナガ・ヨトウガ等の鱗翅目幼虫や、リゾクトニアによる株元の腐敗症状などの被害が散見された。 - 秋どり品種（8 月は種）の作型では、高温により生育が前倒しとなり、収穫の遅れ・品質の低下が一部で見られた。 - 単価は 8 月上旬まで 75 円～85 円前後で推移したが、8 月下旬以降は 110～120 円台と高く、日量 400 ケース以上の出荷を維持した。 - は種は 9 月 28 日、収穫は 11 月 13 日に終了した。
メロン	加温半促成～トンネル 早熟	3 月のは種時期から 4 月上旬の育苗時期は、多照により気温が高く推移した。4 月中～下旬の定植後は低温・寡照であったが、5 月中旬以降の着果時期は高温・多照となり乾燥が続いた。6 月上旬は低温・寡照となったが、その後 9 月中旬まで高温・多照となり、糖度の上昇は緩慢となった。3～9 月の日照時間は平年比 104 %、降水量は同 107 %で、天候の変化が大きい年であった。

品目	作型	作業・出荷・生育の経過
おうとう	露地 (雨よけ)	・開花は気温が確保されたため平年より4日早かった。開花時期の気温が平年より低かったが、5月の日照時間が多かったことで訪花昆虫が活発に飛び、結実量は平年並となった。その後、気温は高く推移したことで果実の成熟が進み、収穫は平年より4日早かった。 ・品質は1果重及びBrix値による糖度は、ほぼ平年並だった。 ・病虫害は黒星病が一部の園地で発生した。
りんご	露地	・開花は平年より4日早く、結実率は平年並に確保された。開花後以降の生育は概ね順調に進んだ。果実肥大は降雨があったため順調に進み、収穫直前の果実体積は平年比105%だった。 ・内部品質は気温が平年より高く経過したため早く進んだ。しかし、着色が緩慢で収穫判断が難しかったが、収穫始は平年並だった。 ・果実品質は平年と比べて硬度は軟く、酸度は低く、着色は平年並、糖度はやや高かった。 ・収量は収穫間近の鳥害で平年を下回った。

2 令和5年 発生が目立った病害虫

■ あぶらな科葉菜類のリゾクトニア菌による病害

(1) 病原菌

Rhizoctonia solani

糸状菌の一種で、様々な宿主・症例がある。あぶらな科葉菜類では株元に発症し、キャベツ・みずなの株腐病、はくさいの尻腐病などもこれに含まれる。

このほか、根菜類の立枯病や根腐病、レタスのすそ枯病、ほうれんそうの株腐病なども本菌によるものである。

(2) 病徴

発症初期は株元に黒褐色の斑点が現れる。

症状が進行すると、病斑部分から侵蝕・陥没する(写真1)。

(3) 伝染経路

土壌伝染が主であり、かん水・風雨などにより土粒子が株元に付着することで、発症に至る。連作・多湿条件によって菌密度が増加し、発症しやすくなる。低温条件での発症事例が主であったが、本年は高温期でも症状が散見された。

(4) 対策

- ① 多かん水を避ける。
- ② ハウス内が過湿とならないよう、換気を行う。
- ③ 発生ほ場では、強風時・雨天時のハウス裾の開放を避け、土粒子の飛散に注意する。
- ④ 多発ほ場では連作を避けるとともに、薬剤による防除を行う。



写真1 株本に現れた病斑



写真2 病斑から分離されたリゾクトニアの菌糸

さつまいも（かんしょ）

【上川農業改良普及センター】

1 旭川市内における栽培の現状と課題

(1) 導入の背景

さつまいもは中南米を原産とし、温暖な気候を好むヒルガオ科の作物である。国内では、鹿児島県・茨城県が主な産地として知られているが、道内でもここ10年で作付けが増え、288haと全国で7番目の産地となっている（図・『2020年農林業センサス』より）。

旭川市では冷涼な気候であることから、かつて（概ね2000年代まで）は5月下旬～6月上旬までにさつまいもの苗を定植する必要があった（表）。しかし、水稻の移植作業と競合するため、畑作・野菜専業の農家がわずかに作付けするのみであった。

近年は、温暖化等の影響により、直近5か年を見ると、6月10日前後に定植しても収量が確保できる気象条件となっている（表）。この時期は、水稻移植、大豆は種の各種作業との競合が少ないことから、小麦・大豆に代わる新たな水田転作作物として注目されるようになった。

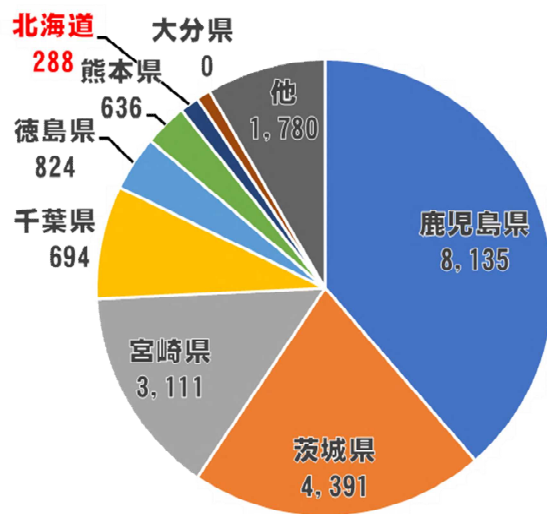


図 さつまいもの作付面積（ha）
（2020年農林業センサスより）

表 定植晩限（積算2400℃）の目安
（目標…収量2～2.5t/10a、10月15日収穫）

1990年代(1990～1999年)	6月2日
2000年代(2000～2009年)	6月3日
2010年代(2010～2019年)	6月8日
直近5か年(2019～2023年)	6月14日

※旭川アメダスより算出。

(2) 現状と課題

市内では2022年（令和4年）から本格的な栽培が始まり、豊田・米飯地区、永山地区の農業者を中心に約30戸が取り組んでいる。

主な品種は、茨城県でも多く栽培されている「シルクスイート®」「べにはるか」の2品種で、2023年（令和5年）の作付面積は約6.5haである。

一方、マルチの敷設・除去、定植、収穫、つるの除去は手作業のため、多くの人手や労力を要するが、農業後継者やパート等の外部雇用数は年々減少し、作業遅れが生じている（写真）。このことが収量・品質の低下、規模拡大の阻害要因となっている。



写真 マルチは地温の確保に必要な
だが、破れやすく、収穫時の除去作業に時間を要する

2 機械化作業の実際

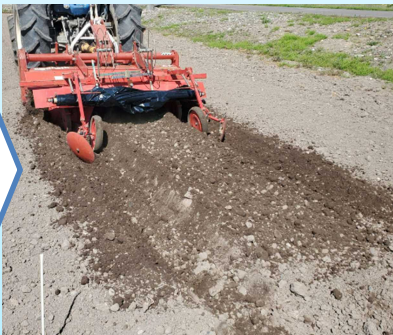
適期作業の実施に加え、1 ha 以上の規模で作付けを行う場合は、機械化による省力化が望ましい。具体的な作業の流れは次のとおり。

(1) ほ場準備（5月下旬～6月上旬）

①耕起・施肥



②うね立て



③マルチの敷設



うね立ては、テーラーで可能であるが、30cm 程度の高うねができるとなお良い。

通路幅は 130～150cm 程度、うね幅は 50～60cm 程度が一般的である。

（うね幅は、防除機やトラクタの車幅に合わせる）

マルチは、雑草抑制、地温確保のため、緑色または黒色を用いる。

(2) 定植（6月1日～15日）

定植機（1畦、手押し型）



苗をセットした状況



苗を左写真のようにセットし、時速 2～3 km 程度で植える。

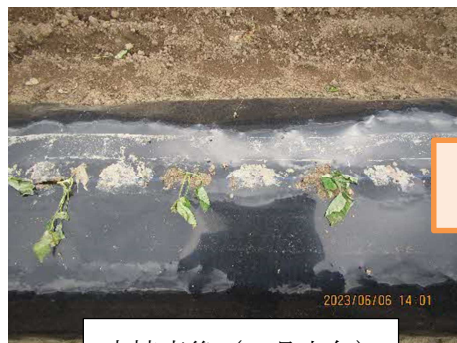
株間は 30～35cm（苗の本数…概ね 2,000～2,500 本/10a）

1 日あたりの作業面積の目安は 20～30a。

【定植後～収穫までの
管理】

欠株が多いほ場では、
手作業で補植する。

防除及び追肥は基本的
に行わない。



定植直後（6月上旬）



9月下旬

(3) 収穫（10月上旬～下旬） ・ ・ ・ 定植後の平均気温積算で 2,300～2,500℃前後

①茎葉処理



②マルチ剥がし（手作業）

⇒マルチの巻き取り



③掘り上げ



④選別、集荷（手作業）



くびれ・曲がり・ねじりな
どは規格外品として除く

50馬力程度のトラクタを使用し、にんじんの収穫等で用いる1畦デガーで掘り上げる（デガーは、中古の参考価格として40～60万円程度）。

4名で①～④までの作業を行った場合
10a当たりの合計作業時間は、20～30
時間程度である。

3 栽培実態（永山地区の事例）より

永山地区で主に作付けされている「シルクスweet®」「べにはるか」「ゆきこまち」3品種について、今年度の栽培比較事例を紹介する。

(1) 耕種概要

定植日	定植方法	株間	通路幅	うね高	うね幅	被覆
6/6	機械移植 (4節斜め挿し)	30cm	150cm	35cm	60cm	マルチ (黒色)

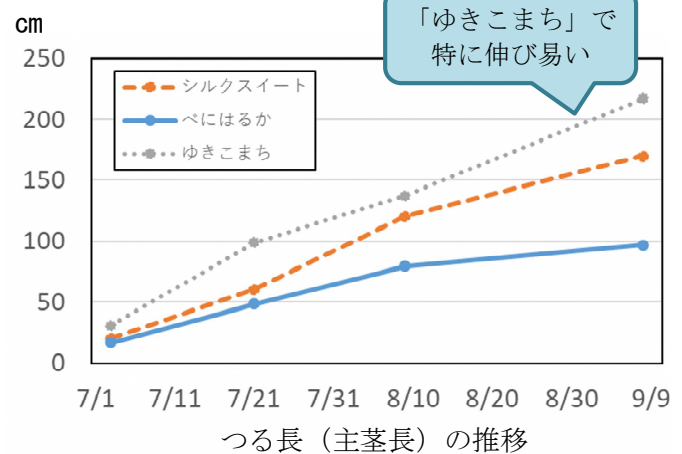
(2) 施肥量

施肥方法	施肥月日	肥料銘柄	施用量 (kg/10a)	成分量 (kg/10a)		
				窒素	リン酸	加里
全層施肥	6/1	S839	40	3.2	5.2	3.6

※施肥窒素量 4 kg/10a を基準とし、地力に応じて減肥した。

(3) 品種の特徴、生育・収量調査結果

品種	特徴 (※『北海道さつまいも マニュアル』より引用)
シルクスweet®	収量性・肥大がよい。甘 みが強く人気
べにはるか	形状が良好。干しいも加 工などに適
ゆきこまち	形状が良好で収量性が 良い。つるが太い



品種	収穫日	定植～収穫までの積 算気温 (°C)	1株いも数 (個)	平均1個 重(g)	規格内率 (%)	実収量 (kg/10a)	[目標]
シルクスweet®	10/4	2,582	6.8	321	97.2	1,981	2,000～ 2,500
べにはるか	10/7	2,618	7.4	209	89.1	1,717	
ゆきこまち	10/9	2,638	9.2	197	98.5	2,064	

※いもの揃い（平均的な3株）



シルクスweet®



べにはるか



ゆきこまち

I 空育195号（そらきらり）実証展示ほ調査結果

【上川農業改良普及センター】

令和5年度、たくさん穫れて病気にも強い新品種である空育195号（そらきらり）の実証展示ほ（7地点）で調査していますので、その結果について御紹介します。

1 空育195号（そらきらり）の品種特性について

中食・外食向け品種である「きらら397」「そらゆき」を対象に、①多収であること、②いもち病抵抗性が強いこと、を長所に持ち、玄米品質がやや劣ること、を短所に持つ品種です。

2 苗質調査結果について

「空育195号」は、「きらら397」と比較すると、乾物重が重く、充実度も高く、育苗には問題点はありませんでした（表1）。苗揃いも良く、育苗しやすいとのコメントが聞かれました。

表1 苗質調査結果

	育苗日数	草丈 (cm)	第一鞘高 (cm)	葉数 (枚)	乾物重 (g/100本)	充実度 (乾物重/草丈)
空育195号（7筆）平均	29	14.9	2.7	4.0	3.77	0.26
きらら397（5筆）平均	31	15.3	2.7	4.3	2.80	0.24

3 生育調査結果について

「空育195号」は、「きらら397」と初期生育は、ほぼ同等、草丈は長く、茎数は同等でした。幼穂形成期は1日遅い6月27日、出穂期は7月25日、成熟期は3日遅い9月12日でした（表2）。

初期生育調査(6月22日実施)



出穂期調査(7月26日実施)



図1 空育195号・きらら397の草勢

表2 生育調査結果

	移植日	6月21～27日		7月21～26日		幼穂 形成期	出穂期	成熟期	登熟 日数
		草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)				
空育195号（7筆）平均	5/21	37.9	392	84.9	623	6/27	7/25	9/12	49
きらら397（5筆）平均	5/22	35.4	388	74.5	633	6/28	7/24	9/9	47

4 収量及び構成・決定要素について

「空育195号」は、一穂粒数が64.8粒と多く、不稔が少なく、稔実粒数は38,353粒/m²と多い結果となりました。千粒重は同等で、精玄米重は751kg/10aで「きらら397」より59kg/10a多く(109%)。蛋白質含有率はかなり低い結果となりました(表3)。

穂の様子



図2 空育195号・きらら397の稲穂画像

表3 収量及び構成・決定要素

	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒/穂)	総粒数 (粒/穂)	稔実歩合 (%)	稔実粒数 (粒/m ²)	千粒重 (g)	精玄米重 (kg/10a)	蛋白質含有率 (%)
空育195号(7筆)平均	75.6	17.3	616	64.8	39,616	96.8	38,353	24.4	751	6.5
きらら397(5筆)平均	69.4	17.4	608	53.8	33,056	94.5	31,137	24.3	692	8.0

※精玄米重は1.9mm以上

5 まとめ

- (1) 「空育195号」のポイントである高収量は実証されました。収量想定は「きらら397」の120%ですが、当地域での「きらら397」の収量が高いため、109%に留まったと考えられます。
- (2) 「空育195号」栽培7地点での総窒素施肥量は8.0～9.0kg/10aの範囲でした。草丈・稈長が長く、倒伏を考慮すると、施肥量は妥当であると考えられます。
- (3) 「空育195号」の育苗管理はしやすく、苗揃いも良かったです。移植時の苗姿も、草丈・葉数・第一鞘高・移植時茎数ともに問題はありませんでした。育苗日数は、成苗ポットで31日、中苗マットで28日となりました。
- (4) 「空育195号」の登熟日数は、46～52日とバラつき、「きらら397」よりも日数を要します。稔実粒数が多いことが大きな要因であると考えられます。
- (5) 「空育195号」は蛋白仕分け銘柄ではありませんが、各地とも低蛋白でいずれも7.0%を下回る結果となりました。特異な気象条件ではありましたが、主力品種「ゆめぴりか」・「なつぼし」と対照的な結果となりました。

Ⅱ 地域を繋ぐ産学連携「旭農高日本酒プロジェクト支援」

【上川農業改良普及センター】

1 はじめに

旭川農業高等学校では、学生のプロジェクト課題として「北方型稲作の更なる可能性の追求」をテーマに、北方型稲作の可能性と「北の灘」復活による、新たな日本酒開発で地域農業の未来をつなごうと活動している。その一環として地域の酒蔵である高砂酒造との産学連携活動「旭農高日本酒プロジェクト」（以下、プロジェクト）を立ち上げ、令和3年度から活動を開始、酒米の栽培から日本酒の生産、販売における全工程を実践している。

令和4年度は、旭川農業高等学校内のほ場で収穫された酒米品種「きたしずく」を用い、「純米酒兆2022」が醸造された。商品化された3,100本はクラウドファンディングを効果的に活用し即日完売する等、大きな反響があった。

本稿では、地域の産学連携における関係者との協働活動と将来の担い手である農業高校生への学習支援、プロジェクトと地域農業者との接点づくりについて報告する。

2 活動内容

(1) これまでの取組

本プロジェクトは、旭川農業高等学校、高砂酒造(株)、(株)ひかり牧場、上川生産農業協同組合連合会、ホクレン農業協同組合連合会旭川支所米穀課、(株)ティーピーパック、上川総合振興局、上川農業改良普及センター(以下普及センター)で構成され、酒米の栽培、酒造り、ラベルデザイン、販売、栽培支援等、メンバーが役割を活かした取組を実施している。

普及センターは、次代の担い手育成の観点から旭川農業高等学校とつながりを持っており、様々な活動を支援している。

本プロジェクトでは、主に栽培技術に関する支援を行っている。

(2) プロジェクト活動の共有化

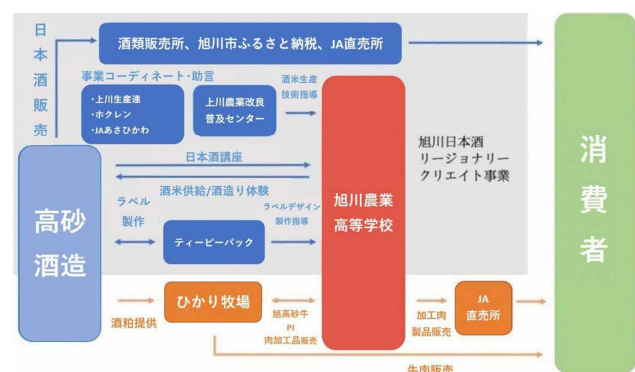
令和5年度、普及センターは構成メンバーの中心である高砂酒造へ生育状況や活動の進捗状況等について情報を共有し合うよう働きかけ、円滑な活動推進を図るしくみを整えた。

(3) 生徒への学習支援

これまでも栽培講習会等で、酒米の栽培技術について支援を行っていたが、農業高校側から「学生達が実際に酒米に触れ、身体を動かせる講義を」との依頼を受け、病害虫予察や生育調査等を題材とし、手や身体を動かすカリキュラムを設けた。また、資料は図、写真、実際の標本等を用いて視覚的に分かりやすく、興味を引く内容のものとした。

(4) 農業者を交えた研修会の開催

令和5年3月に行われた、旭農高日本酒プロジェクト3年目に向けたメンバーの事前打ち合わせ



において、旭川農業高等学校の生徒から、「酒米生産農家の話を直接聞いてみたい」との意見があった。

令和4年度までの活動では、生産現場の農業者とプロジェクトメンバーが接する機会やつながりはなかった。そこで普及センターは、生徒が「北方型稲作の更なる可能性の追求」を学ぶには、現場の農業者との交流が重要ととらえ、プロジェクトメンバーと生産現場の農業者をつなぐための研修会を企画した。地域には、対象となる農業者組織として、JA あさひかわ酒米研究会（以下研究会と記載）が酒米を作付けしており、地域の酒米を使用した「純米大吟醸酒国土無双」を販売している。研究会会長および農業高校の近隣にはほ場を持つ農業者、研究会の事務局である JA あさひかわにプロジェクトの取組や主旨を説明し、酒米生産農家（研究会員）、JA あさひかわ職員が研修会講師を担ってくれるよう依頼した。



(5) 活動の留意点

研修会が円滑に進められるよう、プロジェクト側と十分な打ち合わせを行ない、生徒や高砂酒造等からの要望等を押さえた中で企画した。また、研修会の開催に向けて、プロジェクトメンバー及び酒米研究会に、タイムスケジュールや講義内容、酒米研究会員のほ場地図を記載したメモを送付するなどし、研修会が円滑に進むよう配慮した。

3 活動の成果

(1) プロジェクト活動の共有化

普及センターはプロジェクト関係者との接点を強め、情報を密に共有したことで、取組が円滑に進むようになり生徒と農業者の研修会などの新たな企画もスムーズに実施することができた。

(2) 生徒への学習支援

座学では実際の標本を用い、五感を使う講習会となった。学生からは、「本物の害虫や病害が直接見られてよかった」「現地のほ場で観察するポイントが分かった」等の声が聞かれた。

(3) 農業者を交えた研修会の開催

令和5年7月に研究会員のほ場で研修会を開催した。研修会には、プロジェクトより学生、高砂酒造が参加し、酒米研究会会長、研究会員、JA あさひかわ担当、普及センターは講習時の講師を担った。

現地ほ場では、酒米生産者が講師となり、酒米生産において気をつけていること、酒米を作付けするようになった経緯等について講義を行った。

学生からは、「肥料を選ぶ際は、どのようなことに気をつけているか」等積極的に質問する姿がみられた。また、学生の交流のみに留まらず、研究会員が高砂酒造及び、各プロジェクトメンバーと積極的に情報交換を行う様子がみられた。

生徒及び酒米研究会員双方から、「こんなに近くで酒米に関わる活動があったのに、今までお互いに接点がなかったね」といった声や、JA、農業者からは「自分の母校である旭川農業高校で授業をす

ることになるとは」など、お互いが親しみを持てる時間を共有することができた。

4 結果の考察

(1) プロジェクト活動の共有化

プロジェクト活動が共有化された要因は、普及センターが働きかけ、事務局である高砂酒造が構成メンバー間での動きを共有する仕組みを整えてくれたことや、講習会だけではなく、活動方針に関わる打ち合わせやプロジェクトメンバーとの顔合わせ、酒米の田植え及び収穫、ラベルデザインの制作、酒造り体験等、通年を通して活動に積極的に参画したためと考える。

(2) 生徒への学習支援

当日の栽培講習会において、学生が意欲を持って参加し、研究会員と積極的な情報交換ができた要因としては、①座学のみではなく病害虫の予察などの実技を設ける等、生徒が興味を持つ講義内容を設定できたこと、②研究会員が講師となることで、生徒からの要望であった「酒米生産農家の話を直接聞いてみたい」に応えたことや積極的な情報交換が行えたことが挙げられる。



(3) 農業者を交えた研修会の開催

生徒の要望に即した研修会を開催できた要因として、①実施主体である農業高校・高砂酒造との情報共有を密に行い、要望を押えた中で企画できたこと、②研究会員・JA あさひかわへ研修会参画を促す際に、プロジェクトの概要及び依頼したい内容について丁寧に伝えた結果、快く賛同を得られたこと、③講義の内容及びスケジュール決定の際は、普及センターがプロジェクト及び研究会と十分な調整活動を実施したこと等が挙げられる。

5 今後の課題と対応

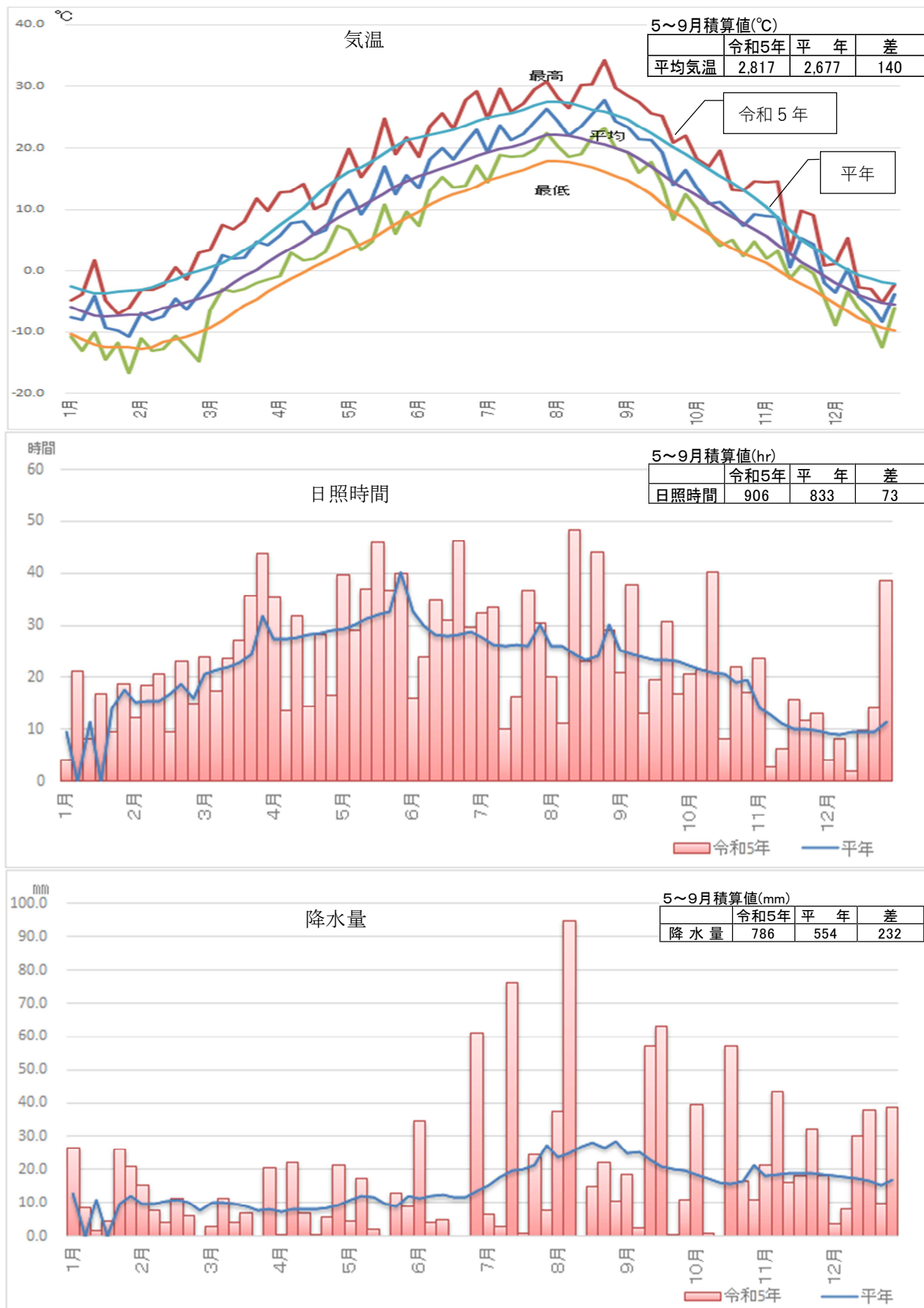
地域の農業者である、「JA あさひかわ酒米研究会」と次代を担う、「旭川農業高等学校」の交流が一過性のものとならず、地域農業の発展に向けて、継続していく必要があると考える。そのため、普及センターは、酒米研究会と農業高校との関わりを持ち続け、酒米研究会がプロジェクトメンバーとして、活動へ参画できるように、コーディネート機能を発揮する必要があると考える。

6 おわりに

旭川農業高等学校は「北方型稲作の更なる可能性の追求」をテーマに、稲作の可能性と、「北の灘」復活による、新たな日本酒開発で地域農業の未来をつなごうとしている。

次代の後継者や企業人となり得る生徒の皆さんに対し、様々な関係機関が賛同し協働を行っており、今後も継続した取組が行われ、更なる発展がなされるよう、普及センターは今後も本プロジェクトへ支援し、将来の担い手が地域で活躍することに期待したい。

I 令和5年 旭川市における気象の経過



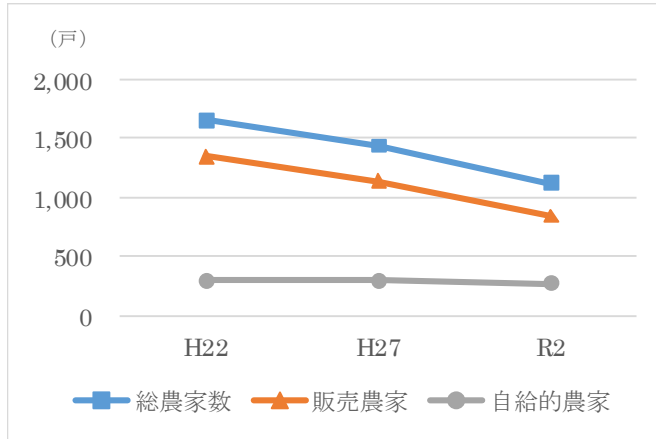
令和5年気象経過観測地:旭川（平年値:1991年～2020年）

月	半旬	令和5年					平年					平年差				
		気温			日照	降水	気温			日照	降水	気温			日照	降水
		平均	最高	最低	時間	量	平均	最高	最低	時間	量	平均	最高	最低	時間	量
1月	1	-7.6	-4.8	-10.7	4.2	26.5	-5.9	-2.5	-10.3	9.5	13.0	-1.7	-2.3	-0.5	-5.3	13.5
	2	-8.1	-3.8	-13.0	21.1	8.5	-6.7	-3.1	-11.2	10.2	12.2	-1.4	-0.7	-1.8	10.9	-3.7
	3	-4.0	1.7	-10.0	8.1	1.5	-7.3	-3.6	-12.0	11.4	11.1	3.3	5.3	2.0	-3.3	-9.6
	4	-9.3	-4.7	-14.4	16.8	4.5	-7.5	-3.7	-12.4	13.0	9.8	-1.8	-1.1	-2.0	3.8	-5.3
	5	-9.7	-7.1	-11.7	9.5	26.0	-7.3	-3.4	-12.4	14.2	9.6	-2.4	-3.6	0.7	-4.7	16.4
	6	-10.7	-6.1	-16.7	18.8	21.0	-7.2	-3.2	-12.4	17.8	12.0	-3.5	-2.8	-4.3	1.0	9.0
2月	1	-6.9	-3.1	-11.0	12.2	15.5	-7.2	-3.0	-12.7	15.3	9.6	0.2	-0.1	1.7	-3.1	5.9
	2	-8.0	-3.1	-13.0	18.5	7.5	-6.8	-2.6	-12.4	15.4	9.6	-1.2	-0.5	-0.6	3.1	-2.1
	3	-7.4	-2.4	-12.8	20.8	4.0	-6.1	-2.0	-11.6	15.5	10.5	-1.3	-0.4	-1.1	5.3	-6.5
	4	-4.5	0.6	-10.6	9.6	11.5	-5.6	-1.3	-11.1	16.9	10.8	1.1	1.9	0.6	-7.3	0.7
	5	-6.4	-1.4	-12.4	23.2	6.0	-5.0	-0.5	-10.7	18.8	10.0	-1.3	-0.8	-1.7	4.4	-4.0
	6	-3.8	3.0	-14.6	14.9	0.0	-4.5	0.1	-10.0	16.0	7.6	0.7	2.9	-4.6	-1.1	-7.6
3月	1	-1.5	3.4	-6.5	23.8	3.0	-4.0	0.5	-9.3	20.6	9.9	2.5	2.9	2.8	3.2	-6.9
	2	2.6	7.5	-3.0	17.5	11.5	-3.2	1.2	-8.2	21.5	10.0	5.8	6.3	5.3	-4.0	1.5
	3	2.0	6.8	-3.4	23.6	4.0	-2.0	2.3	-6.9	22.0	9.7	4.0	4.5	3.5	1.6	-5.7
	4	2.2	8.1	-3.0	27.2	7.0	-0.8	3.5	-5.6	22.9	9.0	3.0	4.6	2.6	4.3	-2.0
	5	4.8	11.8	-1.9	35.6	0.0	0.2	4.5	-4.6	24.5	7.8	4.6	7.3	2.7	11.1	-7.8
	6	4.3	9.8	-1.3	43.7	20.5	1.4	6.0	-3.4	31.8	8.0	2.9	3.9	2.1	11.9	12.5
4月	1	5.9	12.8	-0.9	35.4	0.5	2.7	7.5	-2.2	27.4	7.2	3.2	5.2	1.3	8.0	-6.7
	2	7.8	12.9	3.1	13.5	22.0	3.7	8.8	-1.2	27.5	8.0	4.1	4.1	4.3	-14.0	14.0
	3	8.1	14.2	1.7	31.9	7.0	4.9	10.3	-0.3	27.8	8.2	3.2	3.9	2.0	4.1	-1.2
	4	6.0	10.1	2.0	14.5	0.5	6.2	11.9	0.7	28.3	8.0	-0.1	-1.8	1.3	-13.8	-7.5
	5	6.6	11.0	3.1	28.4	5.5	7.5	13.6	1.6	28.6	8.4	-0.8	-2.6	1.5	-0.2	-2.9
	6	11.2	15.7	7.4	16.5	21.5	8.7	15.0	2.6	29.0	9.4	2.5	0.6	4.8	-12.5	12.1
5月	1	13.2	19.8	6.6	39.7	4.5	9.7	16.1	3.6	29.4	10.9	3.5	3.7	3.0	10.3	-6.4
	2	9.2	15.3	3.4	29.1	17.5	10.5	16.9	4.4	30.2	12.3	-1.3	-1.6	-1.0	-1.1	5.2
	3	11.8	17.8	4.9	37.0	2.0	11.4	17.9	5.3	31.3	11.8	0.3	-0.1	-0.5	5.7	-9.8
	4	17.0	24.9	10.8	45.9	0.0	12.7	19.2	6.6	32.0	9.6	4.3	5.7	4.2	13.9	-9.6
	5	12.5	19.0	6.1	36.6	13.0	13.8	20.3	7.7	32.7	8.7	-1.3	-1.3	-1.6	3.9	4.3
	6	15.6	21.7	9.7	40.0	9.0	14.7	21.2	8.7	40.2	12.2	0.9	0.5	1.0	-0.2	-3.2
6月	1	13.4	18.6	7.4	16.1	34.5	15.4	21.8	9.7	32.5	11.5	-2.0	-3.2	-2.2	-16.4	23.0
	2	18.2	23.6	13.1	23.9	4.0	16.1	22.1	10.8	30.0	12.3	2.1	1.4	2.3	-6.1	-8.3
	3	20.0	25.7	15.3	34.7	5.0	16.8	22.5	11.8	28.4	12.4	3.2	3.2	3.5	6.3	-7.4
	4	18.2	23.1	13.7	31.1	0.0	17.3	23.0	12.5	28.0	11.7	0.8	0.1	1.2	3.1	-11.7
	5	20.8	27.9	14.0	46.1	0.0	18.0	23.7	13.1	28.4	11.9	2.9	4.2	0.9	17.7	-11.9
	6	23.0	29.2	17.1	29.6	61.0	18.7	24.4	13.8	28.7	13.6	4.3	4.9	3.3	0.9	47.4
7月	1	19.3	24.9	14.5	32.4	6.5	19.4	25.0	14.7	27.6	15.5	-0.1	-0.1	-0.3	4.8	-9.0
	2	23.6	29.7	18.8	33.4	3.0	19.8	25.3	15.4	26.4	17.9	3.8	4.3	3.5	7.0	-14.9
	3	21.3	26.0	18.6	10.1	76.0	20.2	25.7	15.9	26.1	19.7	1.1	0.3	2.7	-16.0	56.3
	4	22.3	27.3	18.8	16.2	1.0	20.7	26.3	16.4	26.5	20.3	1.5	1.0	2.4	-10.3	-19.3
	5	24.2	29.5	19.7	36.6	24.5	21.5	27.0	17.2	26.0	21.3	2.7	2.6	2.5	10.6	3.2
	6	26.4	30.7	22.4	30.4	7.5	22.1	27.5	17.8	30.3	27.5	4.3	3.2	4.6	0.1	-20.0
8月	1	24.4	28.2	20.3	20.0	37.5	22.2	27.6	17.9	26.1	23.6	2.2	0.6	2.4	-6.1	13.9
	2	21.9	26.6	18.6	11.2	95.0	21.9	27.3	17.7	26.1	25.1	-0.0	-0.7	0.9	-14.9	69.9
	3	23.5	30.2	19.0	48.3	0.0	21.5	26.8	17.4	24.4	27.1	2.0	3.4	1.6	23.9	-27.1
	4	25.5	30.4	21.7	23.1	15.0	21.0	26.3	16.9	23.5	28.2	4.5	4.1	4.8	-0.4	-13.2
	5	27.8	34.4	23.3	43.9	22.0	20.5	25.9	16.2	24.1	26.5	7.3	8.5	7.1	19.8	-4.5
	6	24.5	29.8	20.1	29.1	10.5	20.0	25.4	15.5	30.3	28.7	4.5	4.4	4.6	-1.2	-18.2
9月	1	23.4	28.5	19.2	20.9	18.5	19.3	24.6	14.8	25.2	24.8	4.1	3.8	4.5	-4.3	-6.3
	2	21.4	27.6	16.0	37.7	2.5	18.3	23.6	13.8	24.5	25.2	3.1	4.0	2.3	13.2	-22.7
	3	21.3	25.7	17.7	13.2	57.0	17.0	22.4	12.5	23.8	23.0	4.3	3.3	5.2	-10.6	34.0
	4	19.4	25.2	14.1	19.7	63.0	15.7	21.2	11.0	23.5	21.0	3.7	4.0	3.1	-3.8	42.0
	5	14.0	20.9	8.4	30.7	0.5	14.5	20.1	9.6	23.5	20.3	-0.4	0.8	-1.2	7.2	-19.8
	6	16.5	22.0	12.6	16.8	11.0	13.4	19.1	8.5	23.2	19.8	3.1	2.9	4.1	-6.4	-8.8
10月	1	13.7	18.3	10.3	20.8	39.5	12.3	17.9	7.4	22.3	18.6	1.4	0.4	2.9	-1.5	20.9
	2	10.9	17.0	6.5	21.4	1.0	11.1	16.7	6.1	21.6	17.4	-0.2	0.3	0.3	-0.2	-16.4
	3	11.2	19.6	4.2	40.2	0.0	9.9	15.5	4.9	21.0	16.1	1.2	4.1	-0.7	19.2	-16.1
	4	9.4	13.2	5.2	8.3	57.0	8.8	14.4	3.7	20.8	15.7	0.6	-1.1	1.5	-12.5	41.3
	5	7.4	13.1	2.5	21.9	16.5	7.8	13.2	2.8	19.0	16.6	-0.4	-0.2	-0.3	2.9	-0.1
	6	9.2	14.7	4.8	17.2	11.0	6.9	11.9	2.1	19.5	21.4	2.4	2.8	2.7	-2.3	-10.4
11月	1	9.0	14.5	2.0	23.6	21.5	5.7	10.4	1.3	14.1	18.3	3.2	4.1	0.8	9.5	3.2
	2	8.8	14.6	3.3	2.8	43.5	4.3	8.7	0.2	12.7	18.5	4.4	6.0	3.2	-9.9	25.0
	3	0.6	3.1	-1.2	6.3	16.0	2.8	6.7	-1.0	11.2	19.0	-2.2	-3.6	-0.2	-4.9	-3.0
	4	5.4	9.8	0.9	15.8	18.0	1.4	5.1	-2.1	10.2	19.0	4.0	4.6	3.0	5.6	-1.0
	5	4.5	9.1	-0.4	11.7	32.0	0.3	3.9	-3.1	10.0	18.9	4.1	5.2	2.7	1.7	13.1
	6	-1.9	0.8	-4.3	13.0	18.0	-0.8	2.7	-4.2	9.8	18.5	-1.2	-1.8	-0.1	3.2	-0.5
12月	1	-3.5	1.2	-8.9	4.1	3.5	-1.9	1.4	-5.4	9.3	18.1	-1.5	-0.2	-3.5	-5.2	-14.6
	2	0.3	5.4	-3.3	8.2	8.0	-3.0	0.2	-6.6	9.1	17.6	3.3	5.2	3.3	-0.9	-9.6
	3	-4.3	-2.6	-6.2	2.0	30.0	-3.9	-0.6	-7.7	9.5	17.5	-0.4	-2.0	1.5	-7.5	12.5
	4	-5.7	-2.9	-8.5	9.7	38.0	-4.6	-1.3	-8.6	9.5	16.6	-1.1	-1.6	0.0	0.2	21.4
	5	-8.3	-5.2	-12.4	14.2	9.5	-5.2	-1.8	-9.3	9.5	15.4	-3.1	-3.4	-3.2	4.7	-5.9
	6	-3.8	-2.3	-6.1	38.5	38.5	-5.6	-2.2	-9.7	11.4	17.1	1.8	-0.1	3.7	27.1	21.4

参考資料

Ⅱ 統計資料

1 農家数の推移



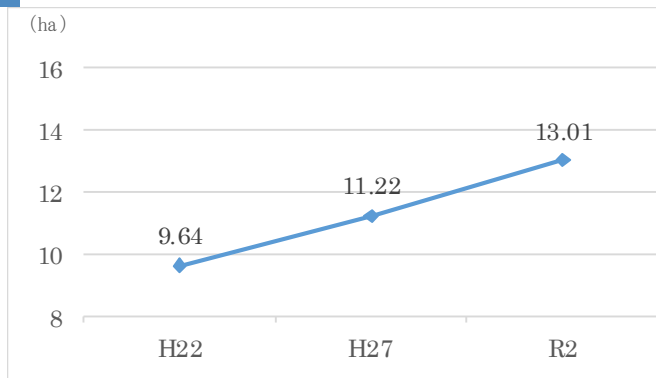
(単位: 戸)

各年2月1日現在

年	販売農家	自給的農家	総農家数
平成22年 (2010)	1,346	301	1,647
平成27年 (2015)	1,133	298	1,431
令和2年 (2020)	843	273	1,116

資料: 農林業センサス (H27, R2)、世界農林業センサス (H22)

2 1 農業経営体当たりの経営耕地面積の推移



(単位: ha, 経営体)

各年2月1日現在

年	総耕地面積	経営耕地のある農業経営体数	1 農業経営体当たりの経営耕地面積
平成22年 (2010)	13,320	1,382	9.64
平成27年 (2015)	13,201	1,177	11.22
令和2年 (2020)	11,596	891	13.01

資料: 農林業センサス (H27, R2)、世界農林業センサス (H22)

3 主要農作物作付面積・生産量及び生産額

作物		令和2年			令和3年			令和4年		
		作付面積 (ha)	生産量 (t)	生産額 (千円)	作付面積 (ha)	生産量 (t)	生産額 (千円)	作付面積 (ha)	生産量 (t)	生産額 (千円)
水稲		6,130	38,100	7,924,800	5,790	36,200	7,547,700	5,680	35,500	7,650,250
畑作物	小麦	1,010	3,370	130,082	1,080	3,430	121,079	1,100	3,760	155,664
	大豆	633	1,330	152,950	764	1,390	182,507	773	1,720	270,728
	ばれいしょ	141	4,480	175,048	137	2,544	124,209	125	2,713	135,415
	てん菜	152	11,100	129,870	167	12,200	137,860	175	13,100	144,100
	そば	1,330	984	247,279	1,260	870	218,631	1,290	889	223,139
	計	3,266	21,264	835,229	3,408	20,434	784,286	3,463	22,182	929,046
飼料作物		42	767	9,261	60	727	9,821	57	1,297	11,932
牧草		1,798	36,566	252,305	1,885	36,308	250,525	1,655	35,064	241,941

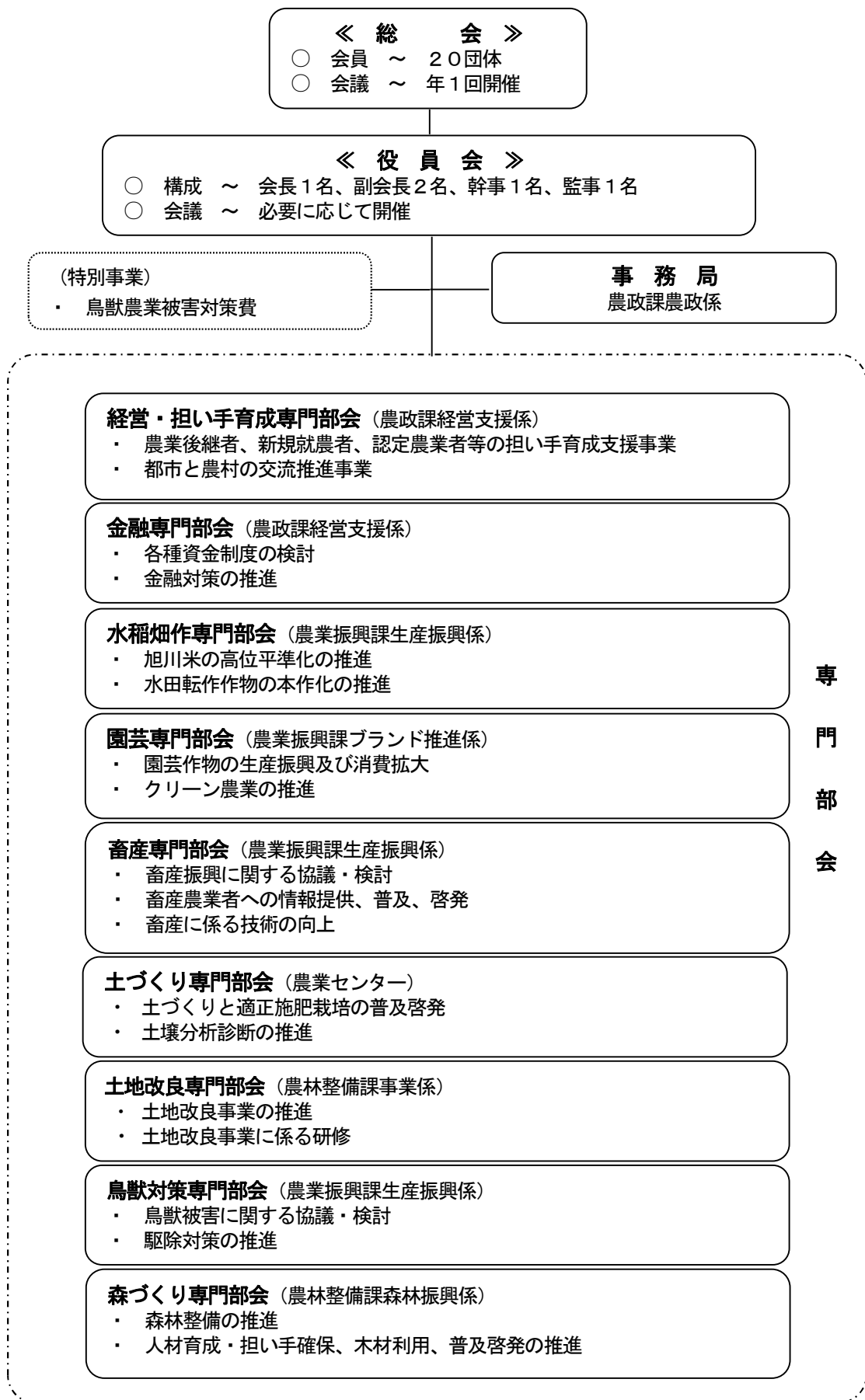
作物			令和2年			令和3年			令和4年		
			作付 面積 (a)	生産 量 (t)	生産額 (千円)	作付 面積 (a)	生産 量 (t)	生産額 (千円)	作付 面積 (a)	生産 量 (t)	生産額 (千円)
野菜	果菜類	いちご	16	10	8,747	28	9	8,472	26	4	6,554
		かぼちゃ	400	82	8,929	293	87	10,364	701	120	9,369
		きゅうり	132	191	64,301	141	215	57,712	194	186	48,929
		ししとう	65	29	38,893	67	29	38,818	72	31	39,564
		なんばん	89	29	34,497	86	26	29,818	76	29	30,130
		トマト	193	209	74,012	194	217	81,362	171	192	70,674
		中玉トマト	17	9	3,203	10	5	1,976	20	6	2,232
		ミニトマト	299	153	111,238	256	146	94,185	307	146	111,482
		ピーマン	254	197	114,297	217	189	83,842	321	180	84,797
		メロン	495	100	41,542	485	80	38,901	484	86	43,020
		なす	11	4	1,685	10	4	910	7	3	515
		小計	1,971	1,014	501,343	1,787	1,008	446,360	2,379	982	447,266
	葉茎菜類	グリーンアスパラ	2,662	48	62,871	2,881	51	72,608	2,121	62	76,179
		キャベツ	10	9	950	10	4	415	0	4	389
		こまつな	2,300	291	128,053	2,440	303	127,089	2,390	299	128,366
		サラダナ	191	23	17,044	191	16	11,959	191	16	12,376
		しゅんぎく(株張り)	69	7	6,376	69	6	5,215	69	7	7,235
		しゅんぎく(摘み取り)	347	53	53,257	363	48	48,067	342	45	48,179
		セルリー	27	12	3,145	27	11	2,393	27	12	2,683
		ターサイ	180	52	17,095	200	45	14,300	200	46	14,903
		チンゲンサイ	875	255	111,163	988	235	98,323	953	261	111,119
		軟白長ねぎ	97	55	34,779	100	58	36,097	85	56	33,189
		青(小)ねぎ	480	56	59,743	480	63	59,742	440	48	53,428
		その他ねぎ	80	10	6,001	85	8	5,004	78	7	4,746
		玉ねぎ	210	92	7,064	165	55	3,997	189	96	7,840
		パセリ	170	44	69,582	181	39	56,628	181	35	61,943
		ほうれんそう	1,615	90	73,061	1,585	68	51,366	1,335	64	52,776
		結球レタス	239	81	15,772	218	74	13,695	175	78	15,152
		サニーレタス	272	76	28,683	272	76	30,393	264	72	30,665
		リーフレタス	272	84	30,683	272	81	32,469	274	73	28,194
		みずな	228	44	20,505	285	33	15,185	277	26	12,962
		ブロッコリー	—	—	—	—	—	—	625	75	15,987
		小計	10,324	1,382	745,826	10,812	1,273	684,945	10,216	1,382	718,311

作物			令和2年			令和3年			令和4年		
			作付面積 (a)	生産量 (t)	生産額 (千円)	作付面積 (a)	生産量 (t)	生産額 (千円)	作付面積 (a)	生産量 (t)	生産額 (千円)
野菜	根菜類	かぶ	85	16	4,907	60	14	3,477	35	12	3,639
		ばれいしょ (生食用)	200	32	3,048	200	43	5,872	184	39	3,037
		ばれいしょ (加工用)	13,900	4,448	172,000	13,500	2,501	118,337	12,300	2,674	132,378
		さつまいも	0	0	0	100	15	2,530	376	56	7,836
		ラディッシュ	76	49	12,346	76	19	11,292	49	21	14,075
		小計	14,261	4,545	192,300	13,936	2,592	141,508	12,944	2,801	160,965
	軟莢類	さやいんげん	91	10	14,823	90	6	8,010	85	5	7,204
		さやえんどう	30	2	6,385	38	2	5,895	38	1	4,448
		えだまめ	80	8	5,302	80	6	4,209	80	6	3,087
		スイートコーン	6,150	688	27,294	5,752	858	32,693	4,971	972	38,156
		小計	6,351	708	53,805	5,960	872	50,807	5,174	984	52,895
	他	果菜～軟莢	1,700	101	39,310	1,758	103	77,958	22	27	41,472
		小計	1,700	101	39,310	1,758	103	77,958	22	27	41,472
	野菜合計		34,607	7,750	1,532,584	34,253	5,848	1,401,578	30,735	6,175	1,420,909
花き	切花		942	－	76,021	968	－	80,009	867	－	87,316
	花壇苗		4	－	582	4	－	592	4	－	511
	花き合計		946	－	76,603	972	－	80,601	871	－	87,827

作物		作付面積 (ha)	生産量 (t)	生産額 (千円)	作付面積 (ha)	生産量 (t)	生産額 (千円)	作付面積 (ha)	生産量 (t)	生産額 (千円)
果樹	りんご	19.9	272.6	47,705	19.9	244.2	44,371	19.9	271.4	49,313
	おうとう	23.6	53.8	86,866	23.6	39.9	66,931	23.6	25.3	42,440
	なし	4.6	36.8	5,101	4.5	23.8	2,679	3.7	27.0	3,040
	その他	6.9	22.4	6,682	7.9	22.3	7,031	7.9	22.4	7,063
	果樹合計	55.0	385.6	146,354	55.9	330.2	121,012	55.1	346.1	101,855

畜産			生産量	生産額 (千円)	生産量	生産額 (千円)	生産量	生産額 (千円)
畜産	子畜生産	乳牛(頭)	278	54,095	265	49,068	231	20,319
		肉牛(頭)	687	163,140	624	161,709	536	130,989
		初妊(ホル)(頭)	23	10,649	22	7,518	21	5,540
	生乳(t)		3,091	283,342	2,942	277,128	2,939	277,667
	枝肉生産	乳牛(t)	360.8	317,046	302.5	284,675	278.0	272,238
		肉牛(t)	307.4	426,924	372.7	585,948	405.0	611,966
		豚(t)	3,210.4	1,715,709	3,169.8	1,654,820	3,548.5	2,042,485
		鶏(羽)	80,825	－	83,942	－	81,680	－
		鶏卵(t)	2,177.2	367,946	2,257.1	505,590	2,200.2	539,049
	畜産合計		－	3,338,851	－	3,526,456	－	3,900,253

機構図（令和5年度）



構成団体一覧（令和５年度）

	機関・団体名	住所	電話番号
推進機関	旭川市(農政部)	旭川市 7 条通 9 丁目 (旭川市上常盤町 1 丁目)	26-1111 (25-7417)
	旭川市農業委員会	旭川市 7 条通 9 丁目 (旭川市上常盤町 1 丁目)	25-6729
	あさひかわ農業協同組合	旭川市豊岡 4 条 1 丁目	31-0111
	東旭川農業協同組合	旭川市東旭川南 1 条 5 丁目	36-2111
	たいせつ農業協同組合	旭川市東鷹栖 1 条 3 丁目	57-2311
	東神楽農業協同組合	上川郡東神楽町北 1 条東 1 丁目	83-2321
	旭川土地改良区	旭川市西神楽 1 線 18 号 390-2	75-5511
	永山土地改良区	旭川市永山 2 条 19 丁目 3 番 11 号	48-2352
	東和土地改良区	旭川市東旭川町旭正 312	32-2241
	大雪土地改良区	旭川市東鷹栖 4 条 5 丁目 639-130	57-2919
	北海道農業共済組合道央統括センター 上川中央支所	旭川市東旭川町下兵村 517 番地	36-2162
	旭川市森林組合	旭川市工業団地 3 条 1 丁目 2 番 15 号	36-4268
関係機関	北海道猟友会旭川支部	旭川市豊岡 8 条 5 丁目 1-17-301	33-5105
	北海道開発局旭川開発建設部	旭川市宮前 1 条 3 丁目 3 番 15 号	32-1111
	北海道農政事務所 旭川地域拠点	旭川市宮前 1 条 3 丁目 3 番 15 号	30-9300
	北海道立総合研究機構農業研究本部 上川農業試験場	上川郡比布町南 1 線 5 号	85-2200
	上川農業改良普及センター	上川郡当麻町宇園別 2 区 748 番地	84-2017
	北海道上川家畜保健衛生所	旭川市東鷹栖 4 線 15 号	57-2232
	北海道旭川農業高等学校	旭川市永山町 14 丁目	48-2887
	旭川市内農民連盟連絡協議会	旭川市東鷹栖 2 線 14 号	57-3173

チャレンジ農業2024

編集 旭川市営農改善推進協議会
発行 令和6年3月

旭川市上常盤町1丁目 水道局庁舎4階

TEL (0166) 25-7417

FAX (0166) 26-8624